

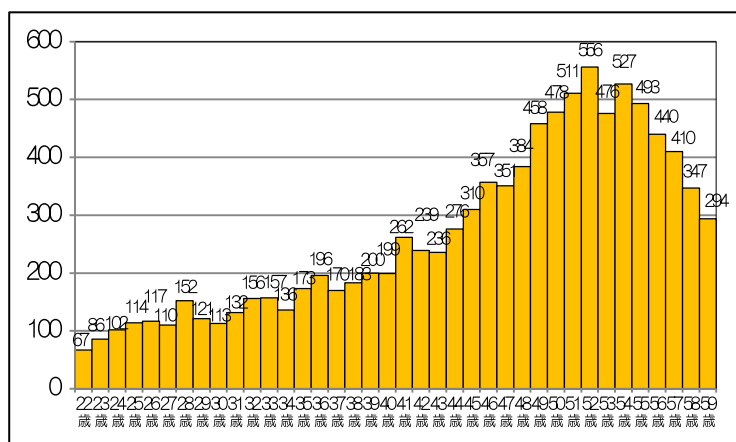
Ⅲ 山口県の教職員の現状

1 教職員の年齢構成

- 教員の大量退職、大量採用を背景に教職員の年齢構成は今後変化して行くことが予想され、将来の年齢構成を踏まえた中堅教員、若手教員の育成に向けて取り組んでいく必要がある。
- 比較的層の薄い中堅教員が、近い将来、管理職や学校運営の中核を担うこととなった時に、的確に職責を果たすことができるよう、学校運営に関する資質能力を身につけることができる取組が必要である。
- 今後、増加して行くことが予想される若手教員については、新規採用教員の急速な増加、特に大学等の新卒者が増加している状況を踏まえ、新たな育成体制・方法を構築する必要がある。

(教職員の年齢構成の変化)

- 本県の教員は いわゆる団塊世代の子どもたちの学齢期に併せて大量に採用されており、現在、教員数は、40歳代後半以降の教職員が最も多く、ベテラン層が極端に厚い構成になっており、今後10年間で、全教職員の45%が退職することとなる。こうしたベテラン教員の大量退職に伴い、新規採用教員が増加していくことが予想される。



山口県の教職員の年齢構成（H26）

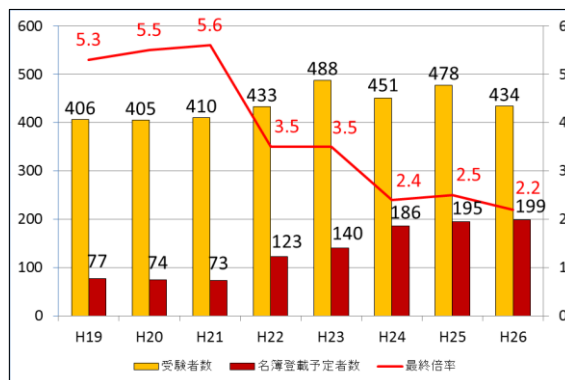
また、中堅層は、採用が少なかった時代の影響を受け、他の世代に比べて薄い構成になっている。

- こうしたことから、今後は、これまで、ベテラン教員が培ってきた優れた教育実践やノウハウを中堅教員・若手教員へ引き継いでいく体制づくりとともに、将来の年齢構成を踏まえた中堅教員、若手教員の育成に向けて取り組んでいく必要がある。
- 中堅教員は、近い将来、学校運営の責任者や中核を担う人材であるが、これまで校務分掌の主要な役割を層の厚いベテラン教員が担っていたため、学校運営に関する経験が浅い状況が見受けられる。層の薄い中堅教員が、近い将来、管理職や学校運営の中核を担うこととなった時に、的確に職責を果たすことができるよう、学校運営に関する資質能力を身につけることができる取組が必要である。
- 今後、増加して行く若手教員については、新規採用教員の急速な増加、特に大学等の新卒者が増加している状況を踏まえ、新たな育成体制・方法を構築する必要がある。

(新規採用者の状況)

- 近年の採用者数の動向は、採用候補者名簿登録予定者（以下「名簿登録者」）数が増加する中、志願者数は、多少の増減を繰り返しながら横ばい傾向であるため、最終倍率は年々低下している。
- その傾向は、最も早く退職者数のピークを迎える小学校で顕著であり、平成21年度5.6倍であった最終倍率は、平成24年度は2.4倍、平成25年度は2.5倍、平成26年度は2.2倍まで低下している。

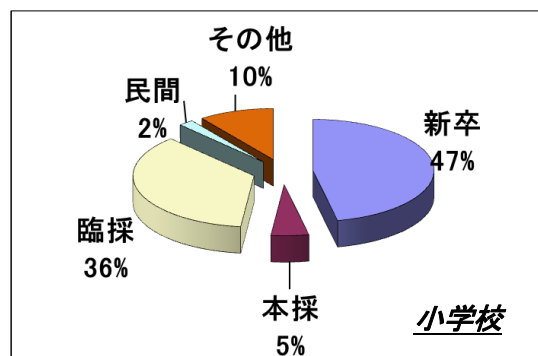
◆受験者数、名簿登録予定者数、最終倍率の推移(小学校)



- また、名簿登録者数の増加にともない、大学等の新卒者の割合が増加傾向にあり、小学校では47%まで上昇している。

これまでは、臨時的任用教員など教職経験を経て教員になる例も多かったが、今後は、大学を新規に卒業した後、そのまま教員になる例も増えてくることが考えられ、養成課程の充実とともに、教職経験の浅い新規採用教員が所属校で資質能力を高める取組の充実が必要である。

◆採用候補者名簿登録予定者の現職等

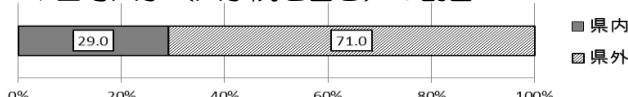


- このほか、名簿登録者における県内出身者が80%程度であるのに対して、県内大学出身者が30%不足となっており、県内の高校生が県外の大学で学んだ後に、本県の教員採用選考試験を受験している状況や、専修免許状を所有している者は10%不足であり、専修免許状取得者が全国と比べて少ない状況がある。

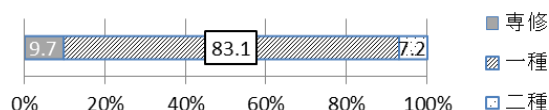
◆出身地の割合



◆出身大学(大学院を含む)の割合



◆担当する校種・教科等の普通免許状の区分と割合



- 学校運営の中核を担っていたベテランの教員が大量に退職していくことは、大きな課題ではあるが、若手教員が増えると学校現場では新たな活力が生まれてくる。大量退職・大量採用により教職員の構成が変化することは、新しい教育を展開していく大きなチャンスと捉えることができ、養成・採用、育成について、変えるべきところは、変えていかなければならない。

2 教育課題の変化にともなう学校の現状

- 現在の学校には、確かな学力の育成や新しい学びへの対応、特別支援教育の充実をはじめ、いじめ等の問題行動や不登校などの様々な教育課題への的確な対応や、家庭や地域との連携が求められている。

(確かな学力の育成や新しい学びへの対応)

- 基礎的・基本的な知識・技能に加え、それらを活用する力、思考力・判断力・表現力等、さらには基盤となる学習意欲など、児童生徒の確かな学力を育成することが求められている。このため、学校は、教員の「児童生徒の学習の状況を理解し、把握する力」「教材を研究し、作成する力」「授業を組み立て、実践する力」など「授業力」を高めるため、授業改善に向けた取組を積極的に進めている。
- 特に、中学校や高校段階では、生徒の学力の差が大きくなっており、その学力の差に対応するための教員の指導技術の向上、指導体制の充実が求められている。
- また、児童生徒のコミュニケーション能力、言語力の低下が指摘されており、言語能力の育成を図るとともに、近年ではICTを活用した授業やグローバル化への対応などの新しい学びに的確に対応していくことも求められている。

(生徒指導上の諸課題等への対応)

- 潜在化、多様化するいじめ等の問題行動や不登校、発達障害を含め特別な支援を必要とする児童の増加などに的確に対応することが求められている。
- いじめについては、潜在化し、陰湿化している傾向がある。ネット上のいじめ問題も急増しており、情報モラル教育も喫緊の課題である。また、不登校の原因や対応も多様化している。
- 規範意識、しつけができていない児童生徒集団においては、子どもたちの無軌道な行動が加わって学級崩壊、学年崩壊を起こす「新しい荒れ」も指摘されている。
- とりわけ、思春期の最中である中学校段階は、情緒的にも不安定なため、問題行動が最も多く、指導の困難性も増している。不登校、非行、学力不振等の問題から中学校卒業後の進路が開けない生徒への対応も喫緊の課題である。

(家庭や地域との連携)

- 少子・高齢化、核家族化が進む中、家庭や地域の教育力が低下している。全国学力・学習状況調査においては、家庭学習時間、お手伝いの時間、基本的な生活習慣が課題としてあげられている。家庭教育の低下は、家庭学習時間、規則正しい生活、食生活など、基本的な生活習慣の課題につながっており、地域の教育力の低下は、異年齢の人たちとのコミュニケーション能力や地域への愛着という心の問題につながっている。このため、学校は、家庭教育の支援や地域と連携した取組を進めている。

- 一方で、社会の情報化や人口の流動化・都市化が進む中、保護者や地域の方々の価値観も多様化しており、学校教育に無関心な保護者への対応や、様々な価値観を有し、自己中心的な要求、理不尽なクレームへの対応も課題となっている。
- また、教育課題が複雑化・多様化しており、学校だけでは解決できない課題も山積していることから、学校・家庭・地域は子どもたちを教育しているパートナーであることを再確認した上で、福祉関係・警察などの諸機関とも連携していくことが重要になってきている。

3 これからの教員に求められる資質能力

- 教員には、教育に対する使命感や情熱、児童生徒を理解し、惹きつける豊かな人間性や確かな学力の育成を図る授業の力や生徒指導に関する力などの幅広い実践的な指導力が必要である。
- また、これからの教員には、様々な教育課題に果敢に挑戦しようとする強い意志や忍耐力、生徒や保護者、同僚教員との人間関係を巧みに構築できる社会性、コミュニケーション能力とともに、組織を動かす力、チームとして動く力が必要である。
- さらには、教職経験を積み重ねる中で変化する教員の役割や求められる資質能力を継続的に身につけることができるよう、生涯にわたって学び続ける向上心と探求心が必要である。

(使命感や情熱)

- 教員は、子どもの人生に大きな影響を与える重い責任を有する職業であり、未完成である子どもの教育に携わる自分自身も未完成であることを強く自覚し、常に職に対する使命感と情熱をもつことが重要である。

(児童生徒を理解し、惹きつける豊かな人間性、教育的愛情)

- 学級担任制である小学校はもとより、教員は、全人格で子どもたちと関わることから、教員の人間性は、クラスの雰囲気、児童生徒の成長にも大きな影響を与える。このため、教員には、教育的愛情や人間的な魅力・バイタリティーなどの豊かな人間性が不可欠である。

(授業の力や生徒指導に関する力などの幅広い実践的な指導力)

- 子どもたちにとって学校生活の大部分を占める授業について、わかる、楽しい、ためになる授業を行うことができる力、また、生徒指導についても、子どもたちを十分に理解した上で、毅然とした態度で接し、理屈で説明し、納得させることができる力が必要である。
- 小学校では、一人の教員が、国語、算数、理科、社会、図工、音楽、体育、さらには最近では外国語など幅広い分野で、多様な授業を行わなければならない。学年が異なれ

ば教え方も異なる。また、中学校・高校と異なり、学級担任制なので、一つの授業案で1回の授業しかできない。まさに「1時間が勝負」であり、確かな授業力が求められる。

- 中学校・高校時代の子どもたちは様々な課題を抱えている。一人ひとりの学習の状況や、生活、心の状況を的確に理解し、課題があれば早期に対応するなど、一人ひとりを大切にする心や力が求められている。

(様々な教育課題の解決に向けた強い意志や忍耐力)

- 学習指導はもとより、生徒指導、保護者対応等に時間と労力を割かれるのが現実である。ストレスも多く、体力を有し、明るく元気であることに加えて、課題解決に向けた忍耐力、打たれ強さも必要である。一方で、子どもの成長はなにものにも代え難く、教職はやりがいのある、魅力のある職業であり、これから教員には、様々な教育課題の解決に向けた強い意志など、高い志と堅い覚悟をもつことが重要である。

(児童生徒や保護者、地域の人々をつなぐ社会性やコミュニケーション能力)

- 児童生徒を理解するために必要なコミュニケーション能力とともに、同僚の教員と円満な人間関係を築くことができるコミュニケーション能力も必要である。自らの成長のためにも、同僚や先輩教員の声に謙虚に耳を傾け、支えあうことができる教員集団を構築するためにも、コミュニケーション能力も必要である。
- 本県では、コミュニティ・スクールや地域協育ネットなどの家庭や地域と連携した教育の取組が積極的に進められており、家庭や地域の人々とのつながりも増してきていることから、自分と異なる年齢層と上手くコミュニケーションをとる能力も必要である。

(組織を動かす力、チームとして動く力)

- 一人ひとりの児童生徒の力を引き出し、授業や、学級、学年、部活動、組織をまとめ、動かす能力も必要である。学級経営において、ルールを決め、学級組織をつくり、学級の秩序を保って経営していくことは、学級担任に求められる重要な能力である。
- また、学校が抱える教育課題が複雑化・多様化する中、教員一人で抱え込まずに、学校組織、チームとして対応していく力、報告・連絡・相談はもちろん、組織の一員として、様々な教育課題にみんなで対応していく、組織として動く力を身につけていくことが必要である。

(生涯にわたって学び続ける向上心と探求心)

- 急速に変化する教育課題に的確に対応できるよう、また、教職経験を積み重ねる中で変化する教員の役割や求められる資質能力を継続的に身につけることができるよう、生涯にわたって学び続ける向上心と探求心が必要である。教員の資質能力の向上とは、専門職である教員として絶えず研究と修養に努め、学び、成長していくことである。